

福祉系 対人援助職養成の 現場から^{③④}

西川 友理

毎年恒例のワーク

この連載の31号に書かせていただいた、元学生のエピソード(本来のエピソードから少し改変したもの)があります。以下に再度簡単にまとめます。

…生まれて初めて、児童養護施設にボランティアに行った19歳の学生Aさん。小学校から帰ってきた子どもたちの宿題をチェックした後に、夕食前まで一緒に遊ぶというボランティアです。

Aさんは色んな子ども達から声をかけられ、一緒に宿題をし、遊び、楽しい時

間を過ごしました。特に小学2年生のBちゃんはAさんのことをとても気に入った様子。自分に愛着を示してくれるBちゃんに対して、Aさんも嬉しくなってしまう。

17時50分になりました。その施設の夕食時間は18時です。そろそろボランティアの時間は終わり、Aさんは帰ろうとしました。するとBちゃんが言いました

「A 姉ちゃんと一緒にご飯食べへんの？」

「うん、お家に帰るわ。また来週来るからね。」

ふーん、とつまらなそうなBちゃん。そしてBちゃんはAさんに言いました。

「A姉ちゃん、お母さんおるの？」

「…さあ、あなたがAさんなら、何と答える？」と問う私。

ええーっ！と苦い反応をする学生達。

「そんなん難しいわ…！」

「頑張っ！あ、あなたがそう答える理由も、一緒に書いてくださいね」

「ええー…。」

学生達はその場で答えを考え、配布された意見用紙にその答えの理由と共に書いて、提出します。

翌週には、私はその答えを、回答者がわからないように加工して一枚のプリントにまとめて配布、このプリントをもとに皆で話し合います。

これは毎年大変、得るものが大きいワークです。もちろんAさんには許可をとり、授業で毎年、使わせていただいています。

ワークの答え

毎年少数ながら『いないよ』という回答をする学生がいます。理由としては『なんだか可哀そうだから』『家族について思い出させたくないから』『私はお母さんがいるけど、Aちゃんにはいないかもしれないから』などなど…。

これには多くの学生が異を唱えます。

「それは…うーん あかんやろ…。」

「うん、やっぱり嘘ついたらあかんと思うわ…。」

という学生が多い中、一人の学生は

「ええーっみんな、『いるよ』って言うの？俺、これ書いたんやけどさあ…なんか、俺はいるけど、相手にお母さんいないって、かわいそうじゃない？」という反応。

「可哀そう、って、なんで可哀そうなん？」

「えーだって…。なんか…言いづらいわ…」

「私、父子家庭やで、お母さんおらへんで。私、可哀そうか？」

「う…うーん…」

「それに、いま施設に入所してるってだけで、Bちゃんにお母さんがおるかどうかもわからんやん！」

平成25年に実施された厚生労働省の調査によると、児童養護施設に入所中の子ども達の約86%には、実父または実母がいることがわかっています。このうち27%には実父母両方ともいるとの結果が出ています。

「ああ、そうかあ…。でも、やっぱり俺はその場にいるよって、言えないと思うなあ…」

『いるよ、でもお母さんお仕事に出ちゃっているから、晩御飯お姉ちゃんが作らなあかんねん』『いるよ。でも帰ってもお母さんお仕事中だから晩御飯一人で食べなきゃいけないし、みんなとごはんが食べられるAちゃんが羨ましいなあ』という回答も毎年見られます。

なんだかとても長い回答です。この回答をした学生たちの理由はこうです。

「なんか、嘘ついたらあかんと思うけど、後ろめたくて…。」

「その子は家に帰りたいたいとか思ってる

んじゃないかと思うと、私だけ家に帰って、お母さんとごはん食べるって言いづらくて…。」

「言い訳がましいよなあと思いながら、ついついこんな感じの回答になると思う。」

「それにさ、とても仲良くなった相手なんでしょ？嫌われたりするの、嫌やん。」
これらを聞いて、

「うーん…お母さんいるって答えたら、やっぱり嫌われるって思う？」

と質問する学生がいます。

「嫌われるっていうか…距離とられるかなって思う。私と違う人なんだ、って。」

一番多い回答

例年一番多い回答は『いるよ』とだけ答えるものです。『嘘をついてはいけないと思うから』『本当のことを言ってまっすぐBちゃんに向き合いたいから』という理由です。

「やっぱり嘘をつきたくないしね。」

「そうそう、私も、嘘をつくのはダメだと思うから、きちんと本当のことを伝える。」

そこで私は聞きます。

「今日、何日だっけ？」

「え、18日ですよ。」と、答える学生。

「うん、今あなた、私に嘘をつこうと思った？」

「はい？いえ別に。」

「ですよ。今みたいに、嘘をつく必要のない所では、『嘘をついてはいけない』なんて考えないと思うんです。『嘘つい

ちゃいけない』『本当のことを言わなきゃ』って思ったってことは、『嘘をつく』という選択肢が頭に浮かんだってことだと思うんだよね」

学生は深くうなづきます。

「うん、確かにそう思いました。」

「一瞬ドキッとしてさ、どう答えようかと迷った。正直言って、嘘つくことを考えたなあ。」

「そういう気持ちって、何やねんやる？」

「うーん…やっぱりさ、何か、配慮せなあかんと思うから…。」

一番歓声が上がる回答

『みんなお母さんから生まれて来てるんだよ。だからみんなお母さんはいるよ』という回答には、他の学生達からおお！と歓声が上がります。

「上手い！なるほどねえ！」

「そうやんな、嘘もついてないし、間違っていないもんな！」

となかなか好評。

しかし、一方で、このような声も上がります。

「うーん…でも、Bちゃんの立場になったら、どう思うかな、この回答…。私やったら、“いや、そういうこと言ってるんじゃないでさ…”って思いそう」

「ああ、それこそ“上手い事返したと思ってるねんやろ”って思われそう？」

「そうそう！」

そのうち、一人の学生がボソッとつぶやきます。

「…ていうか、Bちゃんは何でこんな

こと聞いてきたんやろ…。」

そして、自分がどううまく返答するかではなく、Bちゃんにとって良い答えはどのようなものなのかと、Bちゃんの立場を考えようとしはじめます。

一番皆が静かになる回答

『いるよ』という回答の理由に『これから先、きっとBちゃんはいろんな家族に出会うから』『いろんな家があって当たり前だから』と書く学生がいます。表現としては他の多くの回答と同じ「いるよ」という言葉であっても、この理由にはみな「うーん…」と、静かに黙っています。

「確かにそうやね…」

「将来的なことを考えたら、ちゃんと伝えた方がいいね。」

「うん。普通に、普通の事として、答えたらいいんやよな。いろんな家があるんやし。」

どの回答にも共通する思い

その他、毎年様々な回答が寄せられますが、その回答のほとんどに共通する思いがあります。

それは、“Bちゃんを傷つけない”という思いです。

傷つけるかもしれない対応をするのが怖い、なるべく傷つけないように言葉を選ぶ、傷つけるかもしれないけれどすべきだと思うからする…。

しかし、対人援助という仕事をしている以上、どこかで相手を意図せず傷つける、時には傷つけるとわかっていて傷つけることもあると思うのです。私は、それは必要な摩擦だと思っています。

私はそのように傷つけることや傷つくことを、「人間関係の税金」と考えています。

人間関係の税金

子どもの頃は、せいぜいお小遣いで買える買い物をした時に消費税を払うくらいで、多くの人が税金を払うことは少ないでしょう。

しかし、収入を得るようになったら、それと共に様々な税金を結構払わなければいけません。高い収入を得たら、高い所得税を払わなければいけませんし、住民税や固定資産税、たばこ税に自動車税、高価なモノを買ったら消費税もそれなりにします。

税金を払うのが嫌だからと収入を抑えたり、買い物をしなかったりというのは、本末転倒です。日々の生活が広がりません。

これと同じように、人間関係が狭く浅く限定されている状態であると、傷ついたり、傷つけたりすることも少ないでしょう。しかし、人間関係が広く深くなっていくと、心に痛みを感じる機会が増えたり、意図せず痛みを与えてしまう事が起こります。

それが嫌だからといって人を傷つき、傷つけることを避けると、確かに嫌な目に会うことは少ないですが、人間関係の

広さや深さが限定され、良い目に会う機会も極端に減ってしまいます。

もちろん、一概に無遠慮に傷つけあうことがよいことだとは思いません。

基本的に人間関係は、お互いに対する思いやりや礼儀、配慮をもって作っていくものです。

しかし社会を生きていく以上、傷ついたり傷ついたりするということもあるときちんと知っていく事、またそういう体験に直面する可能性もあるという、一種の覚悟のようなものが要るように思います。

特に人の心や生活に深く入り込む機会の多い対人援助職は、他の職業と比較して、傷つき、傷つける痛みに出会う機会が多い職業かもしれません。何かの機会に、この痛みについて考える機会が必要だと思います。またそのような経験を重ねることで、結果的に、人間関係の対応能力は上がります。

だからといって、この痛みについて教えることは大変難しいです。

授業や教育の中で経験させるようなものではなく、何かの拍子に偶然出会うしかない経験であり、またそれぞれの心の痛みに触れるかどうか、こちらから意図的に設定は出来ないためです。

だからせめて、ほんの1分ほど、以下のように話します。

「相手に対して、深くかかわって行けば行くほど、何も傷つけないなんてこと、あるいは何も傷つけられないなんてこと、あるでしょうか。」

「友達、家族、恋人…。どうでしょうか。」

「傷つけるのがいいことだとは思わない、だけど、意図せず傷つけること、傷つけるかもしれないと思いつつ勇気をもって行動することは、絶対に避けないといけないことなんだろうか。」

「そしてあなた自身も、誰か大切な人との関わりの中で、絶対に傷つかないということが、あるだろうか。」

「傷つける怖さや傷つけられる怖さを受け入れるという事が必要な時ってやっぱりあるように思うんです。」

いつかやがて何か気付くかもしれないその時の種を蒔くような気持ちで伝えます。

このワークの正解

もちろんこのワークには正解はありません。どのような回答も間違いではないと思います。ただ、回答とその理由には自らの様々な価値観が現れ、同じクラスにいる友人の様々な価値観や考え方に触れられるワークです。

学生にとっても強く印象に残るワークのようで、卒業後の学生からも「あのワークはよかった!」と好評です。

そして私も、とても楽しみにしているワークです。もう何年も恒例行事のように実施していますが、いまだに目が覚めるような回答が毎年寄せられます。その回答は、今回は内緒です。いずれ、またの機会に。